

トのものと対比した。用いたサルはアカゲザルとニホンザルの 31 頭、年齢は新生児から 31 歳（平均年齢＝ 10.4 ± 10.9 歳）、雌雄は雄 9 頭と雌 22 頭である。靱帯を硝酸と過塩素酸を用い、加熱して灰化し、元素含量を高周波プラズマ発光分析法で定量した。

ヒトの大腿骨頭靱帯では、加齢に伴いカルシウム、イオウ、マグネシウム、亜鉛、ナトリウムの含量が変化しないが、燐含量は有意に増加し、鉄含量は逆に減少した。

一方、サルの大腿骨頭靱帯では、カルシウム、イオウ、マグネシウム、亜鉛、鉄、ナトリウムの含量が加齢に伴い有意に変化しないが、燐含量は加齢に伴い有意に減少した。ヒトとサルの大腿骨頭靱帯の間には、燐含量の加齢変化に明らかな相違が認められた。

34 兵庫県に生息するニホンザル地域個体群の生息実態調査

遠藤美香（兵庫県立大・環境人間学研究科）

対応者：半谷吾郎

本研究では、集落内に存在するニホンザルが利用可能な食物資源量が、群れの集落利用にどのように影響しているかを把握することを目的に、兵庫県篠山市で、農作物加害群の行動域および土地利用実態を把握し、集落出没時の群れの行動と集落への近接性の季節変化を明らかにした。さらに、集落への近接性が最も高くなる時期において、林縁からどの程度の範囲（距離）までの食物資源量が群れの集落利用程度に影響を与えているかを明らかにした。その結果、群れの集落利用が、集落内の人為的な食物資源だけでなく、森林内の食物資源の利用可能性の影響を受けていることが示唆された。また、集落への近接性が最も高まる夏期において、それぞれの集落に対する群れの利用頻度と、林縁からの距離範囲で区分した食物資源量との関係性モデルを比較した結果、最もあてはまりがよいのは、林縁から 30m 以内の距離範囲にある食物資源量を用いたモデルとなった。以上より、少なくとも対象群に対しては、林縁から 30m 以内の距離範囲に存在する食物資源量（特に豆類、芋類、野菜類）を減少させることを、夏期における対策の努力目標として提案できる。

35 Comparative study of white-headed langurs (*Trachypithecus leucocephalus*) in Guanxi Province, Southern China （中国広西壮族自治区の白頭葉猴の比較研究）

秦大公（北京大・崇左生物多様性研究基地）

対応者：渡邊邦夫

すでに 10 年以上にわたって中国広西壮族自治区崇左生物多様性研究基地において観察してきたシロアタマラングールの社会構造、個体群動態、行動パターンについてのデータ解析を行った。特に今回はこの 10 年間に起こった 4 回のアルファメイルの交代にともなう子殺し現象に焦点をあて、他種における子殺しとどう異なるのかという比較を行った。その結果、シロアタマラングールの子殺しは、ハヌマンラングールで見られた子殺しと酷似しており、アルファメイルの交代後、群れ内のアカンボ全てが殺害されている。ただ生後半年を超すと殺される確率は、非常に小さくなる。この観察は、子殺しがオスの繁殖戦略の一環であることを示唆するが、本種の性差が小さいことが、母親のアカンボ防衛能力を高めていることを示すものであった。

36 広鼻猿類のマイクロウェア分析にもとづくオマキザル化石の食性復元

鶴澤和宏（東亜大・人間科学）

対応者：高井正成

ペルー北高地に所在する先史時代の神殿、クントゥル・ワシ遺跡（1800BC-50BC）から出土したシログアオオマキザル（*Cebus arbifrons*）について、飼育個体であった可能性が示唆されている。歯牙マイクロウェア分析と、骨の窒素・炭素安定同位体分析による食性復元を通じ、飼育の有無を検討した。歯牙マイクロウェアについては、現地調査によって採取した出土化石の検鏡を終えた。現在、野生広鼻猿類との比較を進めている。安定同位体比分析の結果は、本標本の食性は野生オマキザル類とは大きく異なり、むしろ遺跡から出土する同時期の家畜種（リャマ・テンジクネズミ）に近いことを示している。本オマキザルが一定期間飼育されていた可能性が高いことが確認された（同位体分析は米田穰准教授（東京大・新領域）らの協力による）。

37 霊長類の脳の形態的および機能的性分化の特性

清水慶子（岡山理科大・理）

対応者：大石高生

本研究は「霊長類の脳の性分化には、アンドロゲンがエストロゲンに転換されずに、そのまま働き、芳香化酵素は必ずしも必要ではない」との仮説に基づき、マカクザルを用い、性ステロイドホルモン、転換酵素、さらにその受容体が、脳の形態的性分化と行動にどのように関与するかを明らかにすることを目的として